

令和3年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体の正答率を見ると、全ての学年が全国値の平均を同等かそれを上回っているが、昨年度の校内の平均正答率を大幅に下回っている。観点別で見ると、「知識・技能」、「思考・判断・表現力」の観点では、全ての学年の平均正答率が同等かそれ以上なのに対し、「主体的な学習に取り組む態度」の平均正答率はどの学年も低い傾向にあった。昨年度はコロナ禍の影響で、以前の学習指導要領でいう「話す・聞く」の領域の単元はほとんどできない状況であった。また、話し合い活動にも制限があるため、国語科のようにコミュニケーションをとりながら問題解決することができず、児童の主体的な学習に課題がある。感染対策を講じながら、交流を深め深い学びを進めていき、単元の中で自己調整を図ることができるような児童を育てていく。
社会	学校全体(5～6年)の正答率について、5年生では全国値を上回ったが、6年生においては、平均正答率が60%と下回った。5年生は学習内容を概ね理解できており、基礎的な知識の習得や資料を読み取る力も身に付いていると言える。6年生はコロナ禍の影響もあり、国土や産業などの社会的な事象について、見学や体験など実際に肌で感じる事が困難な状況であったことが、「知識・理解」の向上につながらず、観点別の正答率にも影響が出たと推察できる。身近な都道府県の地理や特産物など、資料を読み取りながら特徴を理解し、実際に見たり触ったりしながら「生きた学習」を通して意欲を高めていきたい。
算数	学校全体(2～6年)の正答率は全国平均をほぼ上回る結果となった。観点別で見ると「主体的に学習に取り組む態度」の項目において、すべての学年で目標値を超えているか同等であった。「知識・技能」の観点を見ると、どの学年も目標値よりも平均を超えていた。できた喜びによって児童は自信をもち、「主体的な学習に取り組む態度」の資質向上につながっていると考えられる。ただ、「思考・判断・表現」の観点を学年別に見てみると、3年生、6年生の平均正答率が目標値を下回っていた。量感や答えの見積もり、文章題を数直線で示すことなど、問題文を読んで数値をイメージすることが苦手な児童が多いことから、生活場面への置き換えや、複雑な数値から整数への変換、具体物を用いる等、児童の理解を図る工夫をしていきたい。
理科	学校全体(4～6年)の正答率は、70%近くで全国値平均とほぼ同等だったが、6年生においては正答率が60%を下回っていた。カテゴリー別の項目を見ると観点の「主体的に学習に取り組む態度」は学年が上がるにつれて目標値から数値が遠ざかっている傾向が見られた。自然事象の仮説を立証するためには、実験を行うことがカギとなる。しかしコロナ禍によって一人一人が充実した実験をすることができず、師範実験が増えた。よって「なぜ」が生まれにくく、子供たちの意欲や関心が高まりづらかったと推察できる。感染対策を講じた上で、子供たち自らが実験を行う授業を展開していくことで、児童の理解の向上につなげていきたい。

本校の教育目標
○よく考える子
○体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
<ul style="list-style-type: none"> 生きて働く「知能・技能」を習得する力 未知の状況にも対応できる、思考、判断し、表現する力 学びを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力

学力向上にかかわる経営方針
<ul style="list-style-type: none"> 北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実 「できる」喜びが味わえる授業改善 GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用 授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進(きたコンの扱い方を含む)

校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会(研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会)、分掌(授業改善推進プラン、図書館、GPO研修会【GIGA構想に係わる研修会】)、放課後補充教室(学力フォローアップ教室)等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
<ul style="list-style-type: none"> 課題解決型・探究型授業の実践 学習活動「振り返り」の充実 児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり 十分な教材研究によるねらいの明確化 児童が主体的に取り組む学習活動 授業のユニバーサルデザイン化 GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 	<ul style="list-style-type: none"> 授業時間確保のための学校行事の見直し 新学習指導要領解説及び小中一貫カリキュラムに沿った内容を、さらに独自に解説を加えた「要約集」の積極的な活用 次年度実施に向けた、生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの完成 放課後補充教室(フォローアップ教室)の充実 個別最適化をねらった学習タイム 	<ul style="list-style-type: none"> ICTの活用を通して主体的に学ぶ児童の育成を目指した授業の実践 授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観(ブロック会で事後検討) GPO(きたコンの使用法・授業での活用方法などを全職員で行う研修)のサステナブルな計画の作成、及び実施 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 評価規準や評価方法の工夫・改善(きたコンを利用したポートフォリオ評価の活用) きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化 主体的に学習に取り組む態度の「自己調整」及び「粘り強さ」の具現化 	<ul style="list-style-type: none"> 学校ファミリーで情報交換 地域の教育力の活用 ホームページの充実と更新 学校便りの発行(月1回) 80周年記念式典の準備、交流を通して学ぶ郷土愛・地域愛の育成 児童の変容を自身も保護者も感じることができるとのキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 (4年)

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	漢字の読み・書きや言語力に課題が大きく見られた。このことから、普段の国語の学習から、言葉の意味を丁寧に確認する必要がある。また、新出漢字の学習の際も、読み書きについて丁寧に指導するとともに、その漢字を用いた熟語も教えるなど、関連性を大切に指導していく。	国語の授業時間や学習タイムを用いて、漢字テストをこまめに実施していく。また、間違えた漢字については繰り返し練習させたり、その漢字を用いた文章を考えさせたりすることで、読み書きの定着を図るとともに、活用できるようにしていく。また、短い文でも繰り返し作文学習を行い、句点・読点の使い方を始め、文章の書き方の定着を図る。	読む本を漫画や図鑑ではなく、物語や説明文にするなどして読書タイムを充実させる。また、量をこなすのではなく、一つ一つのテストや作文指導を丁寧に言い、振り返りを大切に指導することで、一つ一つの文章や問題について落ち着いてじっくり考える習慣をつけていく。文を書くことが苦手な児童に対しては、型を作ってそれにあてはめて考えを書けるよう指導していく。
社会	昨年度に引き続き、社会科見学など実地に出向いての学習ができていない。また、自分たちの住む地域から、東京都についての内容に広がっている一方で、コロナ禍で体験的に学ぶ機会が失われており、児童も社会科の学習の面白さを実感できていない。動画教材やオンライン教材をうまく活用することで、興味関心を高めていく。	遠方への見学は厳しいが、近くの資料館などを活用して実地での学習体験を行う。そこで、実際にそれらに関わる人の話を聞いたり、実物を見ることで、学んだことが実社会に生きていることを実感させたい。教室では、紙面上の学習だけでなく、動画教材等もうまく活用していくとともに、ポスターを作成するなど、まとめ学習を大切に行うことで、内容の定着を図るとともに、社会科の学習の楽しさを実感できるようにしていく。	身近な地域の話から、毎日のニュースや新聞報道を話題に取り上げながら視野を広げ、考える力を伸ばしていく。自分の考えをより深めるために、子供たち同士の話し合いも積極的に起こっていく。常に高学年の社会科の学習につながる授業展開を心がける。
算数	正答率を見ると最低は40.6%、最高は100%と大きな開きがある。しかし、昨年度の最低は26.5%、最高は100%であったことを考えると、学年内の学力差は少しずつ小さくなってきた。単元にとらわれず、家庭学習に既習事項を多く取り入れたプリントを作成して取り組ませてきた成果が出たと考えられる。	習熟度別学習において、じっくりと取り組む必要のある児童が入るクラスは最低人数での実施を心がけ、手厚く支援していく。また、中位の児童が集まるグループは学力差が非常に大きくなるため、児童間で学び合う機会を適時設け、学習の進みが早い児童も手持ち無沙汰な時間が無くなるように工夫を行う。理解の早い児童が集まるクラスは、授業内容に沿った補充プリントなども準備し、学習に対する意欲をもたせる工夫を行う。	学習内容の理解が深まるよう、家庭学習に既習事項を取り入れたプリントを作成して取り組ませたり、朝学習の時間を有効に活用し、授業内容の復習や家庭学習の確認を丁寧に促す。
理科	内容別の結果で区の平均値を下回ったものは、思考・判断・表現の分野であったり、知識・技能の分野であったりした。実験や観察を行う際に、児童に「じっくりと見させる」こと、「なぜそうなるのか」を考えさせ、まとめさせていくことに力を入れていく必要がある。	区平均を下回ったものは、昨年度の新型コロナウイルス感染防止対策のために休業期間が2ヶ月あった影響や、個別での実験や観察が行えず代表実験に留めた内容、授業内で教科書を読むに留めた発展的内容が多くあった。本年度はできる限り少人数のグループや個人での実験・観察にじっくりと取り組ませ、そこから出た気付きや疑問を大切にしていく。	「季節と生物」の学習なら、気温が上がるにつれて成長を続けるピオトープや緑のカーテンの植物、「星や月」の学習なら、人には誕生日によって決まる星座があることなど、学習内容を実生活につなげられるよう、身近な内容を取り上げたり、興味や関心を持続できるように教室環境を整えたりしていく。